

ウクライナ語を愛でることは ロシア語を護ること

——ウクライナにおけるバイリンガリズムの問題に寄せて——

イーホル・ダツェンコ*

2014年を通じて起こった様々な出来事は、国際社会の注目をウクライナに惹き寄せた。「レヴォリューツィヤ・ヒードノスチ（尊厳革命）」と呼ばれる革命は、100名を超える人々の命を奪ったが、政治的・社会的プロセスの刷新と民主化への希望を与えもした。そして国会選挙の結果が示したのは、大部分のウクライナ人は「スヴォボダ」党によって提案された民族主義的なイデオロギーを支持していないということ、さらには、左岸ウクライナにおける「レニノパード（レーニン像倒し）」と呼ばれる現象がその証しとなったように、ソヴィエト的過去の^{レリクク}残存種としての共産党に対してネガティブな見解を有している、ということであった。2014年の春、クリミア事変の影響の下に、住民の大部分がロシア語話者であるウクライナ東部ではロシアの国旗が掲げられた。この「ロシアの春」と呼ばれる出来事のクライマックスとなったのは、40名以上の犠牲者を出したオデーサ「労働組合の家」の悲劇であり、国連のデータによれば国民の犠牲者数が6000名を超えたとされるドネツク・ルハンスク両州での戦争であった。

ウクライナ南東部における衝突のおもな原因となったのは歴史観の相違、とりわけナチスやウクライナ独立の闘士と協力して行動した OUN-UPA（ウクラ

*名古屋大学大学院国際言語文化研究科後期課程

ウクライナ語を愛することはロシア語を護ること

イナ民族主義者組織－ウクライナ蜂起軍）メンバーの承認をめぐる歴史観の相違であり、さらには当地方の住民の母語であるロシア語の公務における役割の縮小であった。

歴史的展望から見ると、現在のウクライナのテリトリーにおける二言語使用の状況は目新しい現象ではなく、それは古来存在していたものである。たとえば、キエフルーシにおいては三つの言語が機能していた。すなわち、教会の言語としての古代スラヴ語（古代ブルガリア語の東スラヴ型変種）、教会および世俗社会の言語としての古代ルーシ語、そして現在のロシア語・ウクライナ語・ベラルーシ語が派生したところの、多くの地域の変種を持つ生きた民衆語、である。古代スラヴ語と古代ルーシ語は、文語としてのみ用いられており、少なくともそれらが口語において用いられたことを示す何らかの史料は、現在まで見つかっていない。

リトアニア・ポーランド支配の時代（14～17世紀）、ルーシ人の文語はそのステータスを保持し、諸官庁において公用語として用いられている。しかしポーランドのシュラフタ（貴族／士族）やカトリック教会による植民政策のために、さまざまな住民層が、新たな土地への、特に現在のウクライナのテリトリーの南部と東部、とりわけナドニプリャンシチナ（沿ドニプロー地方）とスロボジャンシチナ（スロボダーウクライナ地方）への移住を余儀なくされ、これらの土地の方言はのちにウクライナ語の文語形成の基礎となった。こうしてコサック集団も、ポーランド化の圧力に異を唱える当時の社会の特殊な階層として発生した。ポーランド語の普及は、さまざまな社会層の抵抗を引き起こしただけでなく、ウクライナとポーランドの言語的接触の拡大をもたらし、ウクライナ語が多数のポーランド語起源、ゲルマン語起源、ラテン語起源の外来語を取り込むことを促進した。研究者たちは、ウクライナのエリート、特にコサックの指導者層や聖職者の間における教育レベルの高さについて指摘している。こうして、14世紀から17世紀中頃にかけての現在のウクライナのテリトリーにおいては、民衆口語のウクライナ語、いわゆる文語の「ルーシ」語、ポーランド語、

そして部分的にラテン語が用いられていた。⁽¹⁾

1654年のペレヤスラフ協定以降、モスクワ・ツァーリ国はウクライナ人の政治的生活に対する統制力を徐々に獲得してゆくが、彼らの文化的・教育的ポテンシャルも借用している。キエフの聖職者たちは皇帝一家の養育係であったし、彼らはロシアにおける神学校や教育機関を創設していった。

しかし、本当のロシア化政策を18世紀中頃に開始したのはエカテリーナ二世で、彼女は「ウクライナ人は自らのことをロシア人とは異なる民族であると考えている」という見解を「裏切り」と見なしていた。18世紀末には、すべての学校において教育言語はロシア語となり、学校そのものが廃止されるまでに至った。たとえば、16世紀中頃には学校は大きな村ごとに置かれていたが、19世紀初頭にはそれらの数は10分の1に減少した。農奴制が布かれていたために、ロシア語学校における教育は富裕層の子弟にのみ開かれたものとなり、ウクライナ人エリートのロシア化を引き起こした。1784年には、キエフモヒラアカデミーにロシア語の正書法と発音を導入する一般命令が發布された。移民政策の結果、特に現在のウクライナのテリトリーの南部および東部の獲得に伴い、ウクライナ語使用諸県におけるウクライナ人の割合は、18世紀末の89%から19世紀末には72%まで低下した。⁽²⁾ こうして、18世紀には優勢であったウクライナ語は、100年後には社会の下層に属する人々（農民、人夫、召使）の言語となり、インテリ層や地主、聖職者や軍将校の言語はロシア語となった。また19世紀におけるウクライナ文学の能動的な発展は、ウクライナ語書籍の出版やウクライナ語による上演を禁止した、悪名高いエムス法とヴァルーエフ指令に帰結した。

他方、当時オーストリア＝ハンガリー治下にあったハリチナー地方では、リヴィウのウクライナ人インテリ層の間で、ロシア語やロシア文化に対する共感

(1) *Шевельов, Юрий*. Исторична фонологія української мови. Переклад з англійської. Харків, Акта 2002, С. 497-502.

(2) *Исаевич, Я.Д.* Украинская культура XVIII столетия. У ж.: Вопросы истории, 1980 № 8.

ウクライナ語を愛でることはロシア語を護ること

を示す動きが広まるようになった。いわゆる「モスクワ派（モスクワ主義）」運動である。その発生と成立は、カトリック信仰やポーランド化政策との訣別、ハリチナー地方の行政府が提案していたウクライナ文字のラテン文字化の試みへの抵抗、などによって説明できる。モスクワ派運動の先導者であったギリシャ＝カトリック教会の聖職者たちは、ロシア語に基づいて新聞や雑誌を発行し、文法書を編纂した。彼らは、カルパチア山脈からカムチャツカ半島に至るまでロシア民族は一つのものだ、と表明した。オーストリア政府がモスクワ派の人々を迫害し、牢獄に放り込み、その最重要人物であるヤキフ・ホロヴァツキーはロシア帝国への亡命を余儀なくされたにもかかわらず、モスクワ派陣営の代表者たちはハリチナー地方のインテリ層に大きな影響力を持ち、ウィーンの中央政府において公職を占めてもいた。ドイツ語から「ルーシ語」への法律の翻訳の存在がこのことを証明しており、この「ルーシ語」はロシア語に非常に似通ったものであった。⁽³⁾

モスクワ派の中から、ナロードニキと呼ばれるグループも派生した。それは当初、地域住民の伝統や言語の保護のために活動していたが、のちに左岸ウクライナとの言語および文化的・歴史的遺産の共通性を掲げる思想を表明するようになった。ナロードニキの華々しい代表者となったのは、イヴァン・フランコである。モスクワ派の世界観は、ハリチナー地方だけでなく、ザカルパチア地方においても広まっていった。

1917～20年のウクライナ国家が短命に終わったことや、政権の目まぐるしい交替、そして国内戦などの出来事は、ウクライナ語の健全な発展を保障することができなかった。ウクライナ語の学術研究書や辞書が公刊された1925～31年のウクライナ化時代の成果や、ウクライナ文学および演劇の発展と活動のため

(3) ウクライナ言語学における疑似術語では「ヤズイチエ Язичіє」といわれる。

以下を参照。Мозер, Міхаель. Причинки до історії української мови. За загальною редакцією Сергія Вакуленка. Харків, Харківське історико-філологічне товариство 2008. С. 641-666.

に整えられた条件は、1930年代に無に帰してしまう。かつてツァーリズムの時代、ウクライナ語の使用を制限する試みのみが行われていたとすれば、今度は、ユーリイ・シェヴェリョフの言葉を借りれば、ウクライナ語をロシア語に近づける方向への、言語そのものの構造への目に余る介入が行われ始めた。⁽⁴⁾ 1933年、ウクライナ語の正書法は最大限ロシア語に適合させられ、І（ゲー）という文字は、ロシア語のアルファベットに存在しないというただそれだけの理由によって廃止された。Аби（～するように）、аркуш（枚）、відсоток（パーセント）、краватка（ネクタイ）、навзаєм（～の代わりに）、наразі（今のところ）、позаяк（～なので）などのウクライナ語ならではの単語は、その他多くの同類語と共に、使用が推奨されなくなった。1929年の農業集団化と1932～33年のホロドモール（大飢饉）は、ウクライナ民族の土台であるウクライナ農民層の「脊柱」に損傷を与え、1937～39年の粛清は、「処刑されたルネサンス」と呼ばれる、その最もすぐれた代表者たちを根絶やしにした。これらの出来事は、ウクライナ東部と南部における工業化のプロセスと相俟って、人口の民族構成を著しく変化させた。ウクライナ人の割合は、1929年の80%から1939年には76%に減少し、これに対してロシア人は同9%から13%へと増加した。第二次世界大戦もまたウクライナ全土に深い傷痕を残し、多大な人命の犠牲と破壊をもたらした。

戦後復興の時期、ウクライナ語学校の数も減少し、ロシア語を教育言語とする学校の数が増加する。高等教育機関における教育は、ロシア語のみで行われた。科学・国政・軍事言語はロシア語であった。ソ連邦の移民政策は、唯一不可分のソ連国民を創造する目的で実施された。さまざまな民族の代表者たちが、ソ連邦の各民族共和国に分散して居住し、このようにして彼らの共通語はロシア語のみとなっていった。ウクライナにおける民族的ロシア人、およびロシアにおける民族的ウクライナ人の割合も増加していった。1970～80年には、ウク

(4) Шевельов, Юрій. Українська мова в першій половині двадцятого століття (1900–1941): Стан і статус. У кн.: Шевельов, Юрій. Вибрані праці: У 2 кн. Кн. 1. Мовознавство. Київ, Видавничий дім «Києво-Могилянська академія» 2008. С. 215.

ウクライナ語を愛でることはロシア語を護ること

ライナの映画監督セルゲイ・パラジャーノフや、詩人ヴァシーリ・ストゥース、社会活動家のイヴァン・ジューバが（著書『インターナショナリズムか、ロシア化か？』刊行のかどで）有罪判決を受け、詩人リーナ・コステンコの作品が発禁された。1980年代には、ウクライナの東部と南部においてロシア語を教育言語とする学校の数が増加し、ロシア語学校においてはウクライナ語は個別のクラスが設置されるのみであった。たとえば、1990年にウクライナ語で教育を受けた生徒の割合は、キエフ市で30%、ハルキフ州で28%、オデーサ州で24%、ドネツク州で3%、クリム州（現クリム自治共和国）においてはウクライナ語の学校やクラスがまったく存在しなかった。ウクライナ語学校は西ウクライナにおいてのみ存続し、リヴィウ州ではウクライナ語で教育を受けた生徒が91%、テルノーピリ州では97%であった⁽⁵⁾。しかも、ロシア語を教育言語とする学校の教員は15%の割増賃金を得ていたにもかかわらず、ロシア語授業のクラスは二つのグループに分けられていた。

このようにして、1991年までに、すでに独立国となっていたウクライナにおいて、3つの大きな国民グループが形成された。

- 1) ウクライナ語を母語とするウクライナ人
- 2) ロシア語を母語とするロシア人
- 3) ロシア語を母語とするウクライナ人

2001年に行なわれたウクライナ国勢調査のデータによると、ウクライナ語を母語と答えた者は68%で、ロシア語を母語と答えた者は30%、うち17%は民族的ロシア人であった。

独立後の期間を通して、ロシア語を教育言語とする学校の数著しく減少し、こうした学校は現在のウクライナでわずか6%に過ぎず、しかもそれはおもにロシア語使用地域や併合されたクリミアに集中している。街頭におけるロシア

(5) これらのデータはウィキペディアの掲載記事「ウクライナのロシア化 Русифікація України」(http://uk.wikipedia.org/wiki/Русифікація_України)より引用した(2015年4月20日最終確認)。

語使用の優勢，ビジネスやマスコミ，とりわけ出版物やラジオ放送におけるその使用にもかかわらず，さらにはウクライナにおけるロシア語の「ステータス」がウクライナ語の「ステータス」よりもはるかに高いものとして留まり続けているにもかかわらず⁽⁶⁾，教育機関の突然のウクライナ化，とりわけ個別教科としてのロシア語とロシア文学のカリキュラムからの削除，ウクライナ語の社会的機能の著しい拡大とロシア語の役割の縮小，第二次大戦の慣れ親しんだ戦勝シンボルの否定などのために，親ロシア的な気運が高まり，ウクライナ東部での暴動をもたらし，それは悲しむべきことに，凄惨な戦争にまで発展してしまう。

最近数カ月の出来事は，ウクライナのロシア語話者の住民，ハルキフやマリウーポリ，ドニプロペトロフスクやオデーサ，その他多くの都市村落の住民もまた，ウクライナ語話者の住民と同じくウクライナ国民であり，ウクライナ語話者の住民と同じく，自らが生み落とされた国の運命に無関心ではいられず，その国をわが住まいとして受け取り，そこで幸せに暮らし，子供たちを元気に育てたいと願っている，ということを明らかにした。2014年2月にキエフの独立広場で亡くなった人々の中には，西部諸州の出身者も，東部諸州の出身者も，数多く含まれていた。そして，ニコライ・ゴーゴリ，アンナ・アフマートヴァ，ミハイル・ブルガーコフなど，多くのすぐれたロシア文化の担い手たちがウクライナの大地で生を受けているということも，忘れてはならない。

来たる近い将来が，ウクライナとロシアの両民族の和解のみならず，自国内のウクライナ国民同士の和解の時となることを信じたい。信仰の対象や民族の出自，歴史的記憶の如何にかかわらず，さまざまな住民層の間にバランスや妥協を模索する術を学ばなければならない。ウクライナ国民の一人一人が自由に自らの母語を用いることができるように，これから先もウクライナ語を大切に

(6) オーストリアのウクライナ語研究者ミハエル・モーゼルは，こうした状況のことを「不安定なダイグロシア *неврівноважена диглосія*」と呼んでいる。以下を参照。*Мозер, Міхаель. Співіснування східнослов'янських мов у Білорусі та Україні. У праці: Мозер, Міхаель. Причинки до історії української мови. С. 718-734.*

ウクライナ語を愛することはロシア語を護ること
しながら、ロシア語も護ってゆくことができるように。

To cherish Ukrainian and to protect Russian

Ihor Datsenko

The aim of this article is to review the situation of diglossia in Ukraine in its historical development. On the territory of modern Ukraine from the early time of Kievan Rus' to the mid-18th century besides the vernacular various spoken and written languages were in use. Among them were Old Church Slavonic, Old East Slavic, Old Ruthenian, Latin, Polish. From the 18th century the usage of Russian language extended on the Ukrainian speaking territory. In the Soviet time under the different political circumstances the Ukrainian language was marginalized. Last 20 years the usage of Ukrainian in the society was expanded. On the other hand the role of Russian as official language was reduced. The split in the society, including the language problem, caused the War in Eastern Ukraine. In the near future Ukrainian society must find ways of reconciliation between different social classes regardless of language, religion or historical background.